

多高通信

第105号 平成26年4月25日発行

学校長挨拶

今年も多賀城高校を支援ください

学校を包み込むかのように桜が見事に咲き、春本番を迎えました。4月8日には281名の新入生を向かえ、今年度も、学習に部活動に本気で取り組む多高生の姿を皆様にご報告できることを嬉しく思います。私は、4月の人事異動で第15代校長として着任しました。どうぞよろしく願います。

すでにご承知のことと思いますが、本校は平成28年4月に新学科として災害科学科を開設いたします。今後とも被災地にある学校として「命を守る」ための防災教育を継続しながら、本校に相応しい学科づくりを進めてまいります。また、地域の進学校としての使命を果たすべく、全職員が一丸となって生徒の進路達成に向けて「授業第一」「学業と部活動の両立」を実践してまいります。



第15代多賀城高校 校長 小泉 博 先生
専門科目：世界史
教育についての信条：学校は生徒のためにある
趣味：時代小説、スポーツ観戦、映画鑑賞

祝 39回生 入学おめでとう！



4月8日、多賀城高校の第39回生となる281名が入学しました。担任の先生に名前を呼ばれた新入生たちは元気よく返事をし、校長先生に入学を許可していただきました。入学生を代表して、1年1組の橋本菜さんが、高校生活の抱負を力強く述べました。

地区総体に向けての意気込み

■陸上競技部

部長 芳賀 祐輔（3年2組）

私たち陸上部は、部員全員が地区予選を突破し、県大会、そしてさらに上の大会に進めるよう練習を積んできました。昨年の新人戦では、自分たちの結果と向き合うことで課題を見つけることができました。冬季練習では、新人戦で見つけた課題を一つずつ克服していく練習をメインに、体づくりも行いました。春合宿では、冬季練習でやってきたことを実践に活かすため、かなりの量を走りこみ、その結果、全員が昨年よりも力をつけることができました。

地区予選では自分たちの力をすべて出し切ってきたと思います。応援、よろしく願います。



サッカー部

部長 大西 祐徳（3年1組）



私たちサッカー部は、県大会優勝を目指してこの一年間練習してきました。一戦一戦全力を出し切り、悔いのないように戦ってくるので応援よろしく願います！
*初戦は4月28日の予定で利府、富谷、宮城広瀬、泉館山とのリーグ戦

東日本大震災被災児童自立支援プロジェクト

Support our Kids 海外ホームステイ

■時枝 李帆（3年6組）

私が皆さんに一番伝えたいことは、留学の機会を無駄にしないでほしいということです。私が今回参加した Support Our Kids に応募することを決めたのは定期考査期間中でした。始めのうちは、テストが迫るなか、応募するために必要な作文を書いたりするのは大変だし、どうしようかなと迷っていたら、「絶対行くべきだよ」と言ってくれた背中を押してくれた友達がいまいました。この一言がなかったら、このプログラムに参加することはなかったと思うので、その子には本当に感謝しています。アメリカに留学してから私の世界観は一変しました。土地の広大さ、アメリカの高校生の人となりとフレンドリーさ、そしてホームステイ先でできた新しい家族。どれもアメリカに行かなければ知ることができなかったことばかりでした。そしてなにより、一緒にアメリカに行ったチームSOSとの思い出はかけがえないものとなりました。

最高の思い出と最高の仲間はこのプログラムに参加しなければ得られないものではないです。留学のチャンスを見逃すのは本当にもったいないです。より多くの多高生や東北の高校生の世界観が大きく広がることを願っています。



減災市民会議に参加しました

3月29日に多賀城市で行われた「減災市民会議」未来へ伝えるもの」にパネルディスカッションの司会として相澤真帆さん、小野果菜さん（2年2組）、パネリストとして中村明穂くん（3年1組）が参加しました。ディスカッションのテーマは「千年先への伝承に向けて」ということで、多賀城高校が昨年度から実施している、津波波高標識の設置活動について活動内容を発表しました。

■相澤 真帆（2年5組）

さまざまな所で地域独自の減災や防災が行われていることがわかり、今回の会議で学んだことを活かし、今後の震災に備えたいと思います。

とれじゃー・シティ たがじょうじょういふる

5月6日（火）の12時30分～12時55分放送予定の多賀城市情報紹介番組『とれじゃー・シティ たがじょうじょういふる』で「3・11津波標識設置活動」が取り上げられることになりました。

取材インタビューを受けたのは福田葉さん（3年1組）と小向健太郎くん（3年3組）です。これまでの活動の様子や苦労した点、今後の計画について紹介を行いました。二人とも、この震災を風化させたくないという思いを力強く訴えていました。左の写真は、取材を受けている様子です。

